

複写機ローラー部品

調査会社のデータ・サプライ(東京都台東区)は、プリンターなどに使用されるローラー系部品の需要予測をまとめた。新型コロナウイルスの世界的拡大により、パワレス化が進展し、オフィス向けを主とする複写機の世界需要は前年比約2割減と大きく落ち込んだ。この影響から、2020年の機能性部品(主要13品目)の出荷本数・金額とも2ケタ以上の減少となった。21年以降需要はゆるやかな復調傾向を示すが、24年の出荷本数・金額とも19年比9割弱の回復しか見込めず、各部品メーカーとも構造改革に着手する。

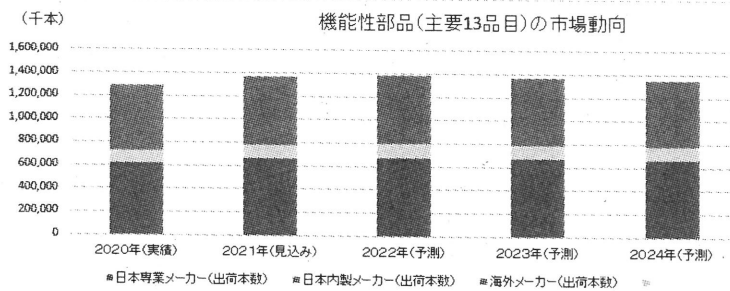
20年の機能性部品の実績では、出荷本数は前年比14・2%減の12億8830万本、出荷金額は同16・3%減の1497億円と減少した。日本・海外メーカーの比率は、出荷本数ベースで、日本が56・3%(専業メーカー48・1%、内製メーカー8・2%)、海外メーカーが43・7%。出荷金額ベースでは、日本メーカーが73・3%(専業メーカー53・2%、内製メーカー20・1%)、海外メーカーが26・7%となった。

20年のローラーメーカーの出荷金額(1650億円)シェアでは、キヤノン(224億円)、住友理工(152億円)、NOK・シンジテック(130億円)、ブリヂストン(82億円)と日系メーカーが上位を占める。しかし、Fancy(5位)、

LEPUBAI(10位)と中国メーカーも台頭してきた。

オフィス向け複写機の生産出荷台数が減少する一方、家庭用モノクロプリンターは在宅勤務進展の影響から出荷台数が伸長した。モノクロプリンターの大手であるブラザーの20年の出荷台数は前年比10・4%増、21年も同2・1%増を見込む。

20年需要2ケタ減少  
オフィス向け落ち込みで



データ・サプライが市場予測

しかし、複写機需要の中長期的な減少は避けられないことから、国内ローラーメーカーは事業再編を開始する。住友理工は、プリンター・複写機向け各種ロール・フレードなどを生産する富士裾野製作所の生産規模を縮小し、大分およびタイ拠点に集約する。NOK・シンジテックは需要動向を見極め、事業の再構築を図る考えだ。